

京都市美術館将来構想

輝かしい伝統を継承し、

世界に誇る美術館であるために

（創建80年目のイノベーション）



平成 26 年 3 月

京 都 市



京都市長
門川 大作

ごあいさつ

京都市美術館将来構想策定に当たり—

国内でも比類なき文化・交流ゾーンである京都・岡崎地域を舞台に、その重厚な外観と風格ある建物で抜群の存在感を誇る京都市美術館。昭和8年、天皇御即位の大礼を記念して、我が国における公立美術館の先駆けとして開設された当館は、昨年、開館80周年の節目を迎えるました。

京都画壇をはじめ優れた作家の名作の数々は実に3,000点にも及び、また、海外の著名作家や美術館に関わる展覧会、時代時代での重要な美術展の開催など、当館はいつの時代においても、京都の文化芸術を牽引する重要な役割を担ってきました。

この度の節目を機に、50年後、100年後の未来においても、国内外の人々を魅了する世界に誇れる美術館を創っていきたい。そんな強い思いを込めて、この度「京都市美術館将来構想」を策定しました。

本構想では目指すべき4つの方向性の下、文化財指定を見据えた本館の再整備、新たな展示スペースの創設や収蔵庫の拡充、さらには来館をより楽しいものにするアメニティ施設の整備、魅力ある美術館を実現するためのスタッフの充実や財源の確保など、様々な具体的な方策を盛り込んでいます。

今後、本構想を基に全力で取組を進めてまいりますので、引き続き、皆様の御支援、御協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、本構想の策定に当たり、熱心に御議論くださいました京都市美術館評議員会、将来構想検討委員会の先生方、貴重な御意見や御提案をお寄せいただいた市民の皆様をはじめ多くの皆様に、心から感謝申し上げます。

目 次

第1章 構想の背景と位置付け

1	輝かしい伝統を継承し、世界に誇る美術館であるために	
	～創建80年目のイノベーション～	1
2	美術館を取り巻く状況	2
3	京都市美術館が誇る類まれな強み	3
4	京都市美術館の課題	5

第2章 目指すべき方向性と具体的方策

1	京都市美術館の目指すべき方向性	7
2	目指すべき方向性を実現するための具体的方策	8

第3章 施設と運営体制の在り方

1	京都市美術館の再整備～伝統と革新の融合～	10
2	運営体制の整備	11

参考資料

1	京都市美術館の概要	12
2	京都市美術館80年のあゆみ	17
3	「京都市美術館将来構想」検討の経緯	20

第1章 構想の背景と位置付け

1 輝かしい伝統を継承し、世界に誇る美術館であるために ～創建80年目のイノベーション～

千年の都・京都は、永く日本文化を牽引してきた。明治維新の後、東京遷都で京都のまちは一時衰退の危機にあったとは言え、昭和の初めにおいても、東京と並ぶ現代美術的一大中心地としての地位を占めていた。そのような中、京都市美術館は、昭和3(1928)年に京都で挙行された天皇即位の大礼を永久に慶祝記念する美術館として、財界はもとより、多くの市民の協力を得て昭和8(1933)年11月13日に「大礼記念京都美術館」の名称で、日本で二番目の大規模公立美術館として開設された。

現建物は、設計競技の公募により一等入賞した前田健二郎の設計図案を基に建設され、公立美術館としては、創建当時の姿を残す国内最古のものであり、近代建築として高く評価されている。戦後は、一時期、進駐軍に接収されたが、昭和27(1952)年には、改めて「京都市美術館」として再開した。

京都市美術館は、我が国における先駆けとして、「美術館機能」の形成を体験した唯一の公立美術館でもある。したがって、80年の歴史を誇る京都市美術館の歩みは、そのまま日本における美術館の歴史といつても過言ではない。

開館3年目には、次代の青年作家の登竜門として、公募展「市展」を開催し、その後「京展」と名称を変えながら、今日まで多くの著名な作家を輩出し続けている。

また、開館以来、購入・寄贈等により、厳選して収集してきた所蔵品は、現在では3,000点を超え、様々な観点から質の高いコレクションの展覧会が開催できる我が国でも希少な美術館となっている。

一方、日展を始めとする我が国的主要な美術団体の全国巡回展は、京都市美術館を経由し、今日でも大小150にも及ぶ団体の展覧会が開催されている。さらに、海外展においても、昭和40年に開催された「ツタンカーメン展」では107万人、昭和39年の「ミロのビーナス展」では89万人、最近では平成21年の「ルーブル美術館展」において、62万人の来館者を集めなど、大規模美術館が増加した今日においても、なお我が国有数の集客力を誇る美術館となっている。

この度、京都市美術館では、開館80周年という記念すべき節目を迎えたことを契機に、輝かしい伝統を次代に継承するとともに、50年、100年先を見据えて、引き続き、「世界文化自由都市宣言」の理念を先導し、世界に誇れる美術館を目指すという決意をもって、京都市美術館将来構想を策定した。



京都市美術館本館（外観）



本館正面玄関内部

2 美術館を取り巻く状況

(1) 社会が求める美術館概念の変化

美術館は、元々、コレクション(収蔵品)と、それを展示する場所(建物)で成り立っており、従来、美術館に求められてきた基本的な機能は、コレクションの収集・保存と調査・研究、展覧会の開催と作品展示であった。加えて、市民や子どもたちに、美術の魅力を伝える普及・教育活動もまた、美術館の重要な役割として位置付けられてきており、とりわけ京都にあっては、地元作家の育成は必須の役割として求められている。

更に、近年、分野を超えた芸術活動の発表、市民の交流、地域文化の発信、地域の賑わい創出など、文化芸術を基盤とした幅広い機能を持つ場として期待されている。

今後の美術館の在り方を考えるとき、こうした社会の変化も十分に踏まえる必要がある。

(2) 美術作品概念の多様化

美術作品の概念は、時代の変化に伴って多様化してきたが、近年は、著しい技術の発展や他分野との協働・融合などにより、メディアアート^(※1)やイン

スタレーション^(※2)をはじめとして、美術作品のカテゴリーが著しい広がりを見せている。

今後、こうした動向にも留意しながら、展示方法やコレクションの在り方を検討していく必要がある。

(※1) コンピューター性能の飛躍的な向上と社会への普及を背景に登場した、新しい芸術表現。

(※2) 様々な素材を組み合わせて配置・構成した、展示空間全体を使った3次元的表現。

(3) 京都市美術館を取り巻く状況

京都には、様々な文化施設や芸術系教育機関が集積しているが、京都市美術館が立地する岡崎地域においては、平成23年3月に「岡崎地域活性化ビジョン」を策定し、ロームシアター京都(京都会館)において、新たな文化の殿堂としての再整備を進めるとともに、京都市動物園についても、全面的なリニューアルを順次、進めるなど、地域全体の活性化を図っている。

また、京都市立芸術大学については、崇仁地域への移転構想を進めるなど、一層の連携に向けた条件を整備しつつある。



3 京都市美術館が誇る類まれな強み

(1) 世界の文化首都・京都を牽引

京都は、1200年を超える悠久の歴史の中で、優れた文化芸術を生み出しながら、重層的に蓄積し、全国に類のない「厚み」のある文化芸術を形成してきた都市である。

また、様々な文化施設や、京都市立芸術大学をはじめとする多くの芸術系教育機関が集積している。

その京都にあって、京都市美術館は、創設以来、市民に優れた文化に触れる機会を提供し、若手作家にとって憧れの舞台として、「世界文化自由都市」を都市理念として掲げる京都の文化芸術を牽引する役割を担っている。

(2) 我が国有数の文化・交流ゾーンに立地

岡崎地域は、明治28(1895)年に、京都の文化を内外にアピールする一大事業として、第4回内国勧業博覧会と平安遷都1100年紀年祭が開催された歴史を持ち、様々な文化施設が集積する我が国有数の文化・交流ゾーンであり、京都市美術館は、その中核的存在である。また、京都市美術館をはじめ、各施設が東山を借景として緑豊かな景観を形成し、琵琶湖疏水沿いは、建築物や桜、緑が一体となった優れた景観をつくりあげている。



清水六兵衛「果実文飾皿」



上村松園「人生の花」

(3) 日本美術史を代表する貴重なコレクション

戦前から収集が始まられた3,000点を超えるコレクションは、竹内栖鳳、上村松園、村上華岳、秋野不矩など、京都画壇を代表する画家や、浅井忠、須田国太郎などの洋画家、清水六兵衛、宮永東山、小合友之助、稻垣稔次郎など、京都工芸の分野においても、価値ある作品が揃っており、京都の、そして日本の美術史をたどるうえで極めて貴重である。



竹内栖鳳「絵になる最初」

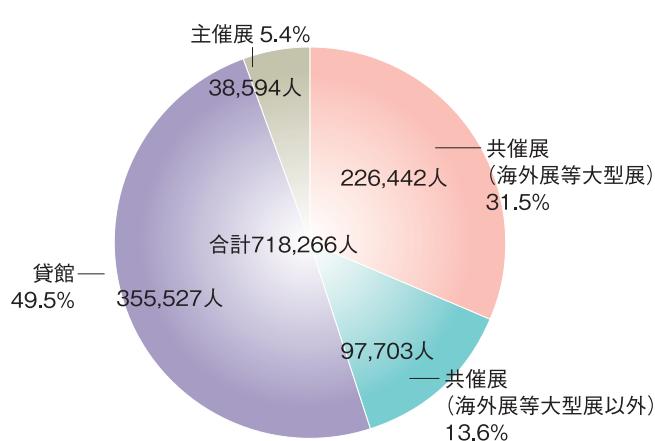
(4) 日本で最も作品が映える美術館

昭和8年に設計コンペで選ばれた前田健二郎設計の本館は、重厚で歴史ある外観を誇り、我が国有数の近代建築として高い評価を受けている。また、自然「光」を取り入れたギャラリーとしての2階展示室は、作家や利用者から、「日本で最も作品が映える美術館」と評価されている。

(5) 多彩な展覧会とトップクラスの集客力

京都市美術館は、自主企画展、全国規模の団体展、芸術系大学などの卒業制作展、貸館などの機能を併せ持つ我が国でも数少ない美術館であり、多彩な展覧会を提供している。主要な美術団体の巡回展は、京都市美術館を経由するとともに、多くの魅力的な海外展を開催しており、我が国屈指の集客力を誇る。

<平成24年度入場者の展覧会別>



<年間入場者数>

年 度	総数 (人)
平成21年度	1,111,357
平成22年度	829,132
平成23年度	1,287,166
平成24年度	718,266

本館大展示室



京都市美術館別館（外観）

4 京都市美術館の課題

輝かしい歴史を誇る京都市美術館ではあるが、建物・設備の老朽化に加え、スペースの不足、普及教育活動の脆弱さ、職員体制の不足など、様々な課題に直面している。

そのような中でも、京都市美術館は、貴重なコレクションを活用した自主企画展をはじめ、海外展、巡回展など多彩な展覧会を開催し、我が国でもトップクラスの入場者数を誇り、日本の美術界において、なお大きな存在感を発揮している。

しかし、現状を容認し、何の方策も講じなければ、京都市美術館が輝き続けることは不可能であり、直ちに、目指すべき将来像を明らかにし、対策に着手する必要がある。

(1) 美術館本来の機能に関する課題

美術館が有するコレクションを市民と共有し、美術館としての特色を示すために、常設展示は重要であるが、スペースや予算の不足により、常設展示を実施していない。また、運営体制の脆弱さから、自主企画展も、限られた回数しか実施できていない。

コレクションについては、これまでの蓄積を十分に踏まえながら、その歴史が途切れないよう、未来へつながるコレクション形成が必要であるとともに、その適切な管理と保存・修復はもちろんのこと、コレクションの一層の活用と調査研究の充実が課題である。

また、近年、美術作品の概念や展示の在り方が多様になっているが、施設の制約から、新たなニーズに対応しきれていない。

5

(2) 社会教育施設としての課題

現代の美術館において、普及・教育活動は極めて重要である。単にコレクションを収蔵し、展示するにとどまらず、子ども・若者の感性を豊かにする教育の場として、すべての世代に開かれた生涯学習の場として、大きな役割が期待されている。

京都市美術館においても、館長による市民講座や、学芸員のギャラリートークなどを行っているが、美術館の魅力を幅広い層に伝えていくために、更なる取組が必要である。

(3) 来館者サービス・施設環境に関する課題

京都市美術館は、年間約70万人から130万人という、日本でも有数の入場者を誇る。

しかしながら、展示場における休憩スペースやトイレ、コインロッカーなどが不足し、ユニバーサルデザイン対応も十分ではない。また、ほとんどの美術館が設置しているミュージアムショップ、カフェ・レストラン等のアメニティ施設がなく、美術館を訪れた人々がゆっくりとくつろぎ、快適に過ごせる場所を創出していく必要がある。

(4) 文化芸術の発信拠点としての課題

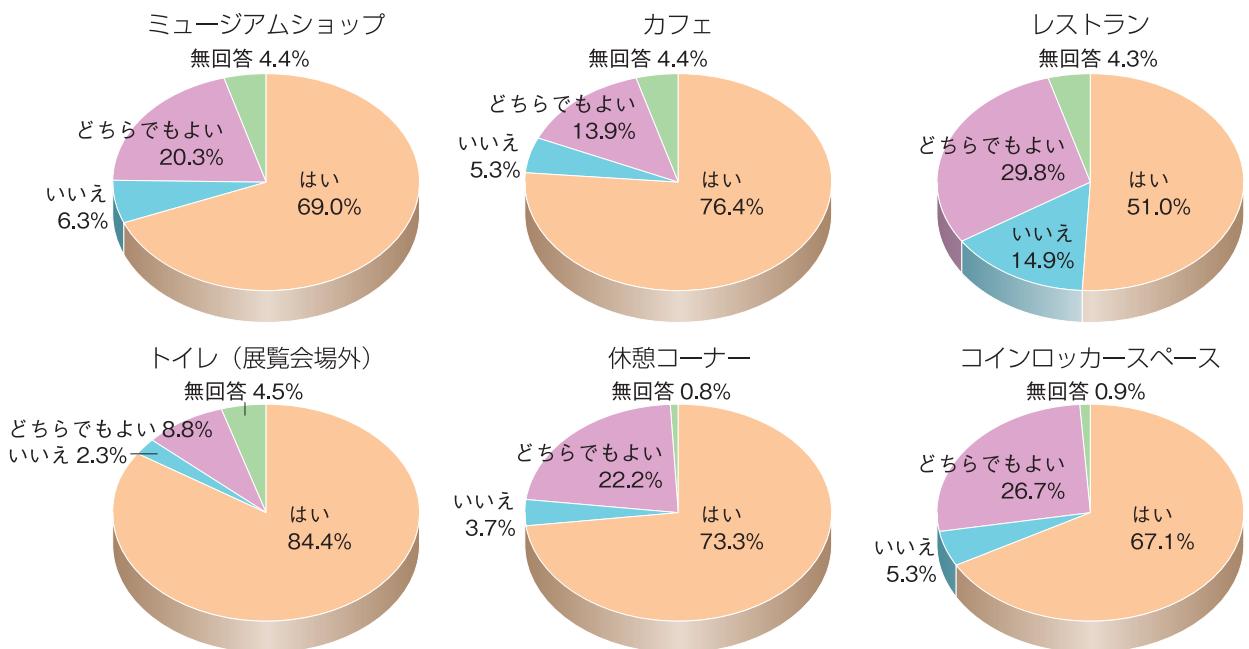
京都市美術館は、京都の文化芸術の発展に大きな役割を担ってきたが、今後も、時代の変化に十分に対応し、世界的視野に立って京都の文化芸術を発信し、牽引することが求められている。また、文化芸術はもとより、文化芸術を基盤とした、ものづくり、観光、MICE^(※)戦略、まちづくりなどにも、これまで以上に寄与できる余地がある。

(※) MICE（マイス）…Meeting（企業のミーティング等）、Incentive（企業の報奨・研修旅行等）、Convention（国際会議、学会等）、Event/Exhibition（イベント・見本市等）の総称。

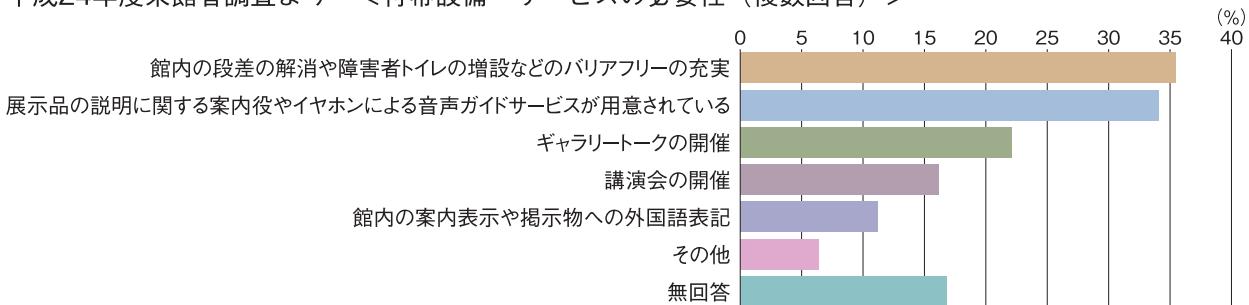
平成24年度全国主要美術館調査より <他館のアメニティ施設の現状>

	ミュージアムショップ	カフェ	レストラン
京都市美術館	×	×	×
東京国立近代美術館	○	×	○
京都国立近代美術館	○	○	×
国立西洋美術館	○	×	○
国立国際美術館	○	×	○
国立新美術館	○	○	○
東京都美術館	○	○	○
福岡市美術館	○	○	×
横浜美術館	○	○	○
北九州市立美術館	○	○	×
金沢21世紀美術館	○	×	○
豊田市美術館	○	×	○
京都国立博物館	○	○	×
京都文化博物館	○	○	○
大阪市美術館	○	×	○
兵庫県立美術館	○	○	○
神戸市立博物館	○	○	×

平成24年度来館者調査より <アメニティ施設の必要性>



平成24年度来館者調査より <付帯設備・サービスの必要性（複数回答）>



第2章 目指すべき方向性と具体的方策

1 京都市美術館の目指すべき方向性

未来に向けて歴史を紡いでいく美術館

京都は、悠久の歴史の中で、多様な文化芸術を重層的に蓄積し、それらをただ守るだけでなく、絶えず新しく生み出すための創意と工夫を続けてきた世界の中でも稀有な都市です。

京都市美術館も、歴史的背景や、これまで果たしてきた役割を再認識したうえで、従来の文化的蓄積を継承し、新たなものを取り入れながら、未来へつなげていきます。また、今後の更なる発展のために、展覧会、展示の在り方、コレクション形成をはじめ、あらゆる側面においてこの視点を貫いていきます。

幅広い世代の人々が集う美術館

京都市美術館は、市民の財産であり、京都以外から訪れるすべての人にとっても京都の文化芸術に触れることのできる大切な場です。京都市美術館は、子どもから高齢者まで幅広い世代に開かれ、市民はもちろんのこと、国内外から人々が集う魅力的な場所であることを目指します。

ゆっくり滞在し、ゆっくり楽しめる美術館

京都市美術館は、市民や日本各地、世界各地から訪れるすべての来館者にとって、作品を鑑賞する場所であるとともに、くつろぎや癒しを提供する場でもあります。

来館者が、作品をゆっくりと鑑賞でき、美術鑑賞の余韻を楽しみ、様々な人と交流できる環境であることを目指します。

日本の文化芸術を牽引し、世界の人々を魅了する美術館

京都市美術館は、80年間の輝かしい歴史の中で、京都のみならず日本の文化芸術の発展に極めて重要な役割を果たしてきました。

今後も、50年後、100年後の未来を見据え、日本の文化芸術の中核として、世界の人々を魅了する存在であることを目指します。

2 目指すべき方向性を実現するための具体的方策

未来に向けて、歴史を紡いでいく美術館

(1) 近代京都の美術・工芸の発展を示す常設展示の実現

新たな展示スペースを整備し、京都市美術館の貴重なコレクションを活用した、京都美術の歴史を示す常設展示の実現を図る。

(2) 魅力ある主催展・自主企画展の強化

京都市美術館の特色・魅力を発信していくため、美術館が設立された経緯や京都の美術・工芸の歴史も踏まえ、主催展・自主企画展を充実させる。また、自主企画展の開催を通じて、コレクションの充実を図る。

更に、主催展・自主企画展を中心として、海外展、巡回展、卒業制作展など多彩な展覧会を開催し、複合的な魅力を持つ美術館を実現する。

(3) 過去から未来へつながるコレクションの充実・活用

様々な資金調達方法を検討しながら、既存のコレクションの流れを踏まえつつ、現代の作品の収蔵も行い、過去から未来へとつながるよう、充実を図るとともに、自主企画展や他の美術館における巡回展などにおいて、更なる活用を図る。

(4) 美術館の基盤となる調査研究活動の充実

作品の収集、常設展の実現、自主企画展の開催などの基礎となる調査研究活動を充実するとともに、作家の創作の背景も含め、必要な資料収集を積極的に進める。

幅広い世代の人々が集う美術館

(1) 現代作家や現代作品の企画展の実施

若手の作家を育成するとともに、若い世代にも京都市美術館に親しんでもらうよう、現代作家の展覧会、現代美術作品の企画展や関連イベントを実施する。

(2) 魅力ある大規模な海外展・全国規模の団体展等の誘致

集客力のある魅力的な海外展・全国規模の団体展の誘致活動を強化する。

更に、千年の都・京都にゆかりのある王朝文化や町衆文化などに触れることのできる京都ならではの展覧会の誘致にも取り組む。

(3) 別館の独自性の強化

美術館別館は、本館プログラムの補助的な役割ではなく、例えば、市民ギャラリーとするなど、その性格を明確にし、活用を強化する。

(4) 芸術系大学や教育機関等との連携

子どもの美術教育をはじめ、あらゆる世代に対応した普及・教育プログラムを充実する。また、情報発信を強化し、より美術館が親しまれる取組を行う。

また、芸術系大学や教育機関、ギャラリー等と十分に連携するとともに、京都市美術館が中心となつたネットワークの構築を図る。

(5) ワークショッフルームなどの新設

京都市美術館が有する貴重な美術雑誌等の資料を公開するアーカイブを整備し、美術館を訪れるすべての人が活用できる場とともに、ワークショッフルームや映像システムを備えたプレゼンテーションスペースの整備、作家が制作している現場を見ることのできる公開制作スペースの設置についても検討を行う。

ゆっくり滞在し、 ゆっくり楽しめる美術館

(1) 展示室等の環境改善

観覧者がゆっくりと鑑賞できるよう、展示室や観覧途中の休憩スペース、トイレ等の環境整備を検討する。

また、本館中庭は、空調機器などが設置され、本来の機能を果たしていないため、機器類を移動し、休憩スペース等としての再生を併せて検討する。

(2) ミュージアムショップ、カフェ・レストランなどの整備

本館内外のスペースを利用して、ミュージアムショップ、カフェ・レストランなどのアメニティ施設の充実を検討する。

(3) ユニバーサルデザイン、多言語対応

美術館を訪れたすべての人が楽しめるよう、施設のユニバーサルデザイン化や多言語対応などの充実を検討する。
⑨

(4) 子どものためのスペースの整備

幼児や子どもを連れていても安心して訪れることができるよう、託児室等として使用できるスペースの整備を検討する。

(5) 夜間開館の実施

すべての来館者がゆっくりと楽しめるよう、他の施設やイベントとの連携も十分に考慮しながら、開館時間の延長について検討する。

(6) 様々な事業の展開

オリジナル・ミュージアム・グッズの開発を促進するとともに、音楽コンサートをはじめ、様々な催しを企画・開催し、多様な美術館の楽しみ方を提供することを検討する。

日本の文化芸術を牽引し、 世界の人々を魅了する美術館

(1) 京都市美術館を中心とするネットワークの構築、施設間の連携強化

国内でも随一の文化・交流ゾーンである岡崎地域に集積する京都国立近代美術館をはじめとする諸施設との連携を強化し、地域全体の視点を持って施策を推進するとともに、京都市美術館を中心に、芸術系大学や文化施設、教育機関等とのネットワークを構築を目指す。また、海外の美術館との連携も視野に入れて検討する。

(2) 新たな魅力を創出する再整備

直面する課題を克服し、今日的なニーズに対応するとともに、新たな魅力を創出し、世界の人々を魅了する施設となるよう、再整備を検討する。

(3) 世界に向けた発信力の強化と事業展開

国内有数の文化・交流ゾーンである岡崎地域の総合案内機能や、観光・MICE戦略との連携、更には、世界に向けた情報発信の強化を検討する。

第3章 施設と運営体制の在り方

1 京都市美術館の再整備 ~伝統と革新の融合~

これらの具体的方策を実現していくために、次のとおり京都市美術館の再整備を検討する。

日本の文化芸術を牽引する京都市美術館の再整備に当たっては、日本の近代建築を代表する本館の魅力を最大限生かしつつ、新たな魅力を創出し、100年後も世界の人々を魅了する美術館となるよう、伝統と革新が融合した建築デザインを検討する。

また、環境にも十分に配慮した整備とともに、岡崎地域全体での施設間の機能の連携や景観形成の観点を踏まえて検討する。

なお、再整備には、巨額の財源の確保が必要となるため、民間活力の導入や、国の補助制度の活用など、あらゆる方策を検討するとともに、利用者や市民、専門家の意見も取り入れながら進めていく。

(1) 文化財指定を見据えた本館の再整備

我が国を代表する近代建築である本館は、将来的な文化財指定を視野に入れ、その風格と魅力を最大限に發揮する再整備を行う。再整備に当たっては、外観を完全に保存するなど、建物の保全に配慮しつつ、ユニバーサルデザイン化やセキュリティの強化をはじめ、現代のニーズに合わせた整備を行うとともに、中庭を再生し、憩いや展示の空間としての活用を図る。

(2) 伝統と革新が融合した新たな展示スペースの創設

現在の活動を充実しつつ、常設展示をはじめとする様々な企画を実施するために、新たな展示スペースを創設する。

新たな展示スペースの創設に当たっては、地下空間の大胆な活用も含め、本館とも調和し、伝統と革新が融合した新しい魅力を創出する建築デザインを検討する。

(3) 美術館の発展に不可欠な収蔵庫の拡充

新たな展示スペースの創設と併せ、将来のコレクションの充実も見据えながら、保存・修復の機能を確保しつつ、収蔵スペースの拡充を図る。

(4) 我が国屈指の文化・交流ゾーンにふさわしいアメニティ施設の整備

我が国屈指の文化・交流ゾーンにふさわしいミュージアムショップ、カフェ・レストランなどのアメニティ施設を整備するとともに、休憩スペースやトイレ等の環境整備を行う。整備に当たっては、疏水に面した趣きのある近代建築である事務棟の活用も検討する。

(5) 新たなニーズに対応した施設の整備

ワークショッフルーム、プレゼンテーションルーム、子どものためのスペースなど、新たなニーズに対応した施設や設備の新設について検討する。

2 運営体制の整備

美術館の運営に当たって、最も大切なのは安定した運営体制である。

とりわけ、京都市美術館は、他の公立美術館や同規模の美術館と比較しても、人員体制の不足は明らかであり、スタッフ体制の充実を検討する。

(1) これからの美術館にふさわしい運営体制の検討

公立美術館として、長期的な展望、継続性を持つて責任ある運営を行うことが自治体の責務である。

そのことを踏まえ、直営による運営に加え、柔軟な運営や、民間活力の導入等の視点から、指定管理制度や、平成25年10月から導入が可能となった地方独立行政法人による運営についても、メリット・デメリット等を十分に検証し、ふさわしい運営体制を検討する。

(2) 将来構想を実現するためのスタッフの充実

展覧会やコレクション、調査研究の充実のためには、学芸員の充実が不可欠である。また、普及・教育活動、広報、資金調達などの強化には、いずれも専門的なスタッフが必要であり、改めて、総合的に現在の人員体制について検証し、必要な体制の確保を検討する。

あわせて、アートマネジメントを学ぶ学生や学芸員をめざす学生などをインターンとして受け入れる制度や、ボランティアの活用、フリーのキュレーターの企画の活用など、本市以外の人材の活用も検討する。

(3) 魅力ある美術館であり続けるための財源の確保

安定した美術館運営や、展覧会の開催、コレクション収集、施設整備などのためには、十分な予算を確保することが必要である。

しかし、本市の財政状況が厳しい中、様々な工夫も必要であり、常に魅力ある美術館とする取組と発信を行い、企業からの寄付や協賛、所蔵品の寄贈に向けた働きかけを行う。

また、資金調達専門のスタッフの確保、ミュージアムショップ・レストラン等も含めたトータルなマネジメント、展覧会収益を美術館運営に充当する仕組みなど、様々な手法を検討する。

1 京都市美術館の概要

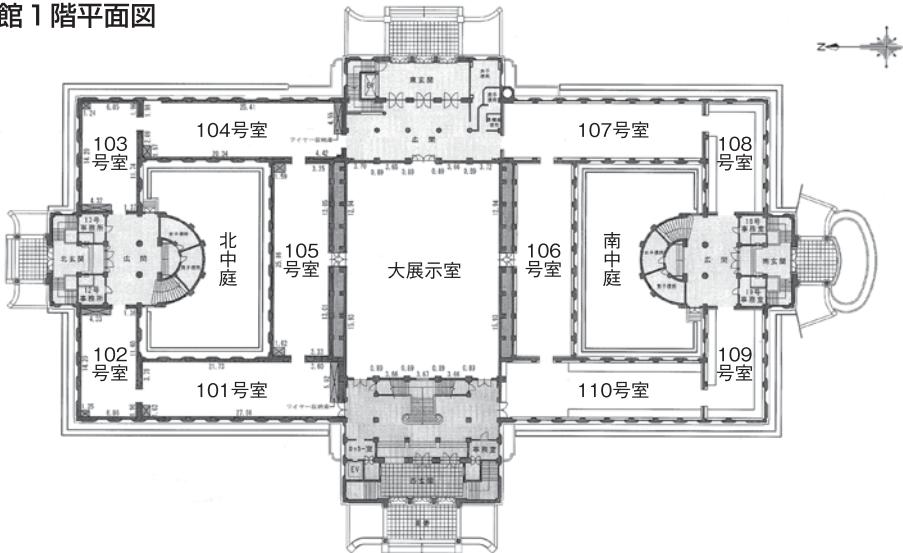
概観

施設概要

	本館	別館
敷地面積	24,331m ²	3,132m ²
構造	鉄筋コンクリート2階建	鉄筋コンクリート一部鉄骨
建築面積	4,657m ²	892m ²
延床面積	9,349m ²	1,967m ²
陳列面積	5,039m ²	916m ²
展示室数	24室	2室
総壁面長	1,832m	372m

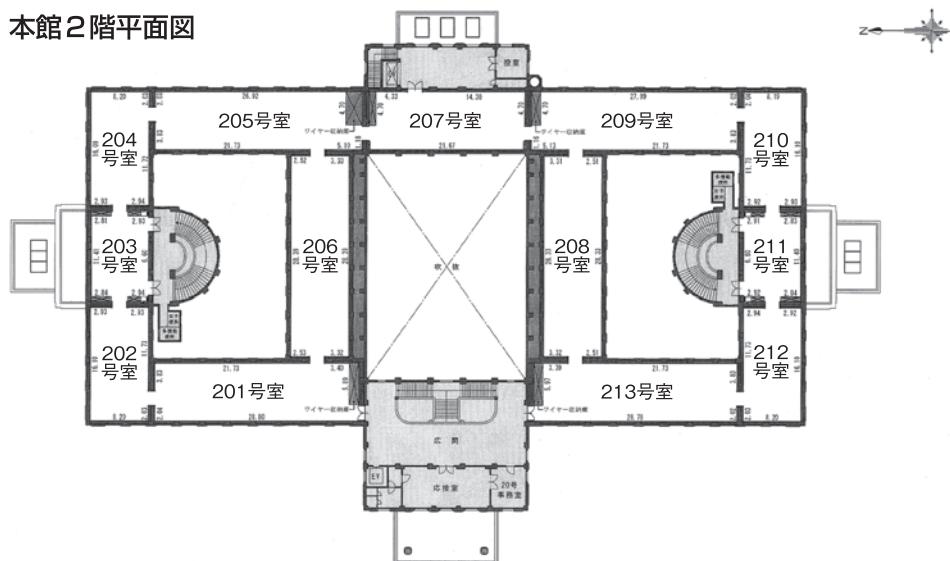
備考：別館は、昭和5年に京都市公会堂東館として建てられ、昭和39年より京都会館別館として用いられていた近代和風の建物。外観は保全、内部を全面改修し、平成12年に美術館別館として新設された。

本館1階平面図

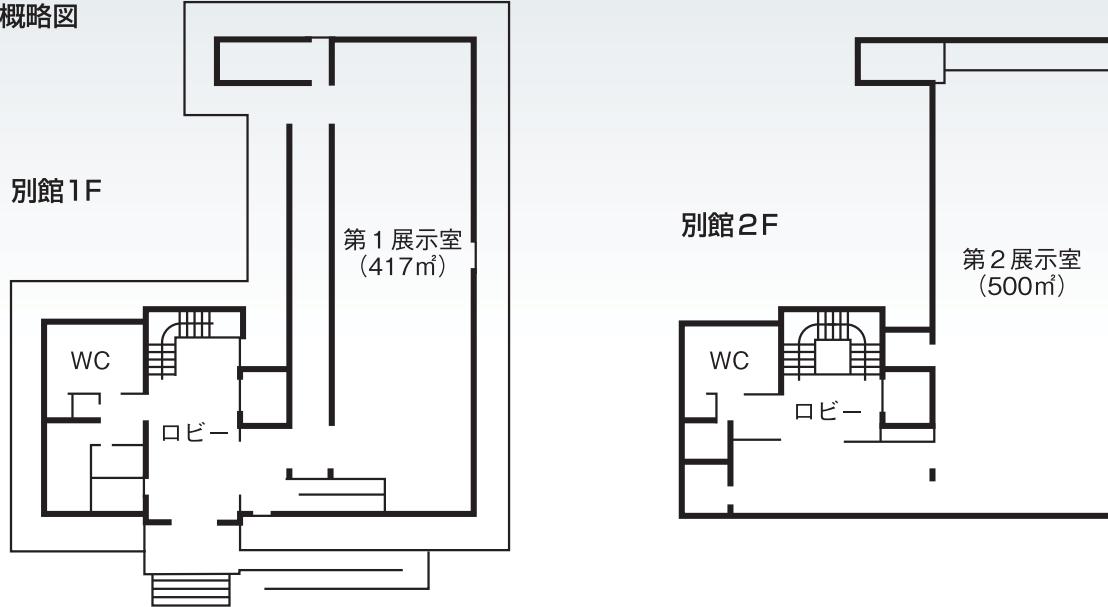


12

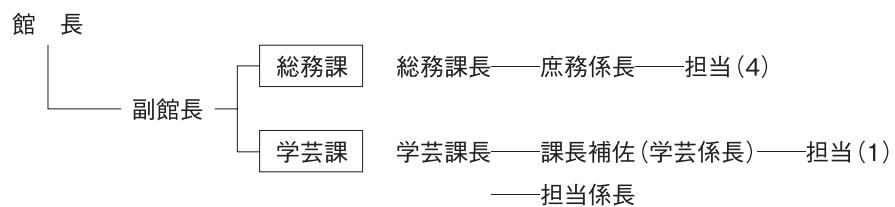
本館2階平面図



別館概略図



運営体制



13

※館長及び学芸課長は非常勤嘱託員、学芸課担当係長は兼職

合計：12名（正規職員10名、非常勤嘱託員2名）※兼職1名を含む。

展覧会

京都市美術館入場者数上位の展覧会

順位	展覧会名	開催年度	会期	開催日数	種別	入場者数	1日当たり入場者数
1	ツタンカーメン展	昭40	10/15～11/28	45	共催展	1,074,495	23,878
2	ミロのビーナス特別公開	昭39	5/21～6/25	36	共催展	891,094	24,753
3	ルーヴルを中心とするフランス美術展	昭36	1/26～3/15	49	共催展	746,314	15,231
4	ゴヤ展	昭46	1/29～3/15	47	共催展	718,749	15,293
5	ルーヴル美術館展	平21	6/30～9/27	80	共催展	618,321	7,729
6	エジプト美術5千年展	昭38	5/26～7/21	57	共催展	586,114	10,283
7	メトロポリタン美術館展	昭47	10/8～11/26	50	共催展	483,797	9,676
8	ロダン展	昭41	9/18～10/30	43	共催展	446,009	10,372
9	ルーヴル美術館展	平17	7/30～10/16	70	共催展	424,810	6,069
10	フランス美術展	昭29	1/15～2/10	23	共催展	420,344	18,276

〈種類別主な展覧会の入場者数と開催日数(過去3か年)〉

主催展(コレクション展)

年度	展覧会名	日数	入場者数
平成22年度	京都市美術館コレクション展 第1期 「円と方」	63日	9,309人
	京都市美術館コレクション展 第2期 「京の閨秀・女流・女性画家—担ったもの／担わされたもの」	57日	18,166人
	所蔵品展 画家たちのヨーロッパ - 浅井忠・太田喜二郎とその系譜	40日	7,439人
平成23年度	京都市美術館コレクション展 第1期 京都にさぐる美術の「こころ」	65日	15,985人
	京都市美術館コレクション展 第2期 模様をめぐって	51日	6,511人
平成24年度	京都市美術館コレクション展 第1期 井田照一 版の思考・間の思索	63日	6,714人
	京都市美術館コレクション展 第2期 京の画塾細見	82日	20,936人
	たし算とひき算でみる一夏の彫刻展	20日	4,937人

共催展

年度	展覧会名	日数	入場者数
平成22年度	ボストン美術館展	49日	257,848人
	高島屋百華展	38日	34,639人
	京都市立芸術大学創立130周年記念展	39日	35,948人
	親鸞展	14日	31,418人
平成23年度	フェルメールからのラブレター	101日	379,528人
	ワシントン・ナショナル・ギャラリー展	68日	307,456人
	親鸞展	51日	149,915人
平成24年度	上村淳之展	45日	25,685人
	大エルミタージュ美術館展	50日	206,843人
	須田国太郎展	53日	15,110人
	リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝	12日	19,599人

貸館の利用率

年度	本館	別館	総数	利用率
平成22年度	83件	63件	146件	95.0%
平成23年度	83件	64件	147件	95.7%
平成24年度	81件	53件	134件	84.5%

貸館は、美術団体の公募展・会員展、芸術系大学等が主催する展覧会などに使用。
平成12年度の別館開館によりギャラリー機能が充実したこともあり、年間150の展覧会が開催され、利用率(貸館利用可能日数に占める割合)は90%前後。

14

コレクション

コレクション内訳——近現代の作品比率

(単位：点)

分類	江戸期	明治大正	昭和戦前	戦後	不明など	総数
日本画	17	233	332	396	81	1,059
油彩画	2	95	150	401	40	688
版画	0	3	32	113	0	454
彫刻	0	34	148	336	68	148
工芸	2	0	6	425	21	586
書	0	3	2	61	23	89
合計	21	368	670	1,732	233	3,024

注：平成25年3月現在

普及教育

市民美術講座の開催状況

年度	ギャラリートーク(回)	講演(回)	作家対談(回)	解説会講座(回)	ワークショップ(回)	シンポジウム(回)	延参加者数(人)	開催日数／開館日数
平成22年度	22	11	3	23	5 (1)	—	4,048	64／315 (20%)
平成23年度	33	6	—	25	12 (8)	—	2,643	76／315 (24%)
平成24年度	67	9 (5)	6	30 (4)	8 (4)	1	3,737	126／315 (40%)

注：()内は外部講師によるもの(内数)。外部講師は、各企画展で1本(講演会またはワークショップ)が基本。

市美術館に普及教育担当学芸員はおらず、各学芸員が各展覧会において普及教育活動を企画。夏・冬期間は別枠でワークショップ。

館長市民講座の開催状況

年度	開催回数(回)	延参加者数(人)
平成23年度	2	130
平成24年度	6	329

アウトリーチの開催状況

年度	京都学講座	出前講座	その他
平成22年度	5	9	3
平成23年度	4	2	1
平成24年度	5	5	1

(参考) 他館の常設展示スペースと収蔵スペース

	延床面積(m ²)	展示室(m ²)	延床面積に占める割合(%)	うち、常設展示室又はコレクション展示室(m ²)	展示室全体に占める割合(%)	収蔵室(m ²)	延床面積に占める割合(%)
京都市美術館	11,316	5,965	52.7%	—	—	956	8.4%
東京国立近代美術館(本館) (工芸館)	17,193 1,858	4,763 658	27.7% 35.4%	2,897 —	60.8% —	1,338 206	7.6% 11.1%
京都国立近代美術館	9,762	2,605	26.7%	1,128	43.3%	1,177	12.1%
国立西洋美術館	17,369	4,420	25.4%	3,058	69.2%	1,097	6.3%
国立国際美術館	13,487	4,064	30.1%	2,032	50.0%	1,795	13.3%
国立新美術館	48,900	14,000	28.6%	—	—	601	1.2%
東京都美術館	37,749	12,441	33.0%	—	—	567	1.5%
福岡市美術館	14,526	4,184	28.8%	2,004	47.9%	1,382	9.5%
横浜美術館	26,829	4,173	15.6%	1,237	29.6%	1,243	4.6%
北九州市立美術館	12,300	3,727	30.3%	1,458	39.1%	1,087	8.8%
金沢21世紀美術館	17,093	3,891	22.8%	945	24.3%	1,496	8.8%
青森県立美術館	21,222	5,054	23.8%	2,999	59.3%	1,138	5.4%
豊田市美術館	11,121	3,245	29.2%	2,095	64.6%	1,011	9.1%
名古屋市美術館	7,232	2,304	31.9%	1,045	45.4%	626	8.7%
兵庫県立美術館	27,461	4,783	17.4%	2,330	48.7%	1,640	6.0%
東京都現代美術館	33,515	7,400	22.1%	3,100	41.9%	1,290	3.8%

2 京都市美術館80年のあゆみ

1933 昭和8年

竣工式を挙行。大礼記念京都美術館開館。
「第14回帝国美術院美術展覧会京都陳列会」開催。

1934 昭和9年

「大礼記念京都美術館年報・昭和8年」を発行。昭和13年まで毎年刊行。開館を記念して「大礼記念京都美術館美術展」を開催。

1935 昭和10年

「本館所蔵品陳列」開催。初めての主催所蔵品展。
「近代日本画名家展」開催。初めての主催特別展。
「京都市美術展覧会」開催。第1回京都市展。

1943 昭和18年

「開館10周年記念展」開催。

1945 昭和20年

「第1回京都市主催美術展」(京展)開催。

1946 昭和21年

駐留軍によって事務所を除く美術館全敷地、建物を接収される。

1952 昭和27年

前年に制定された博物館法に基づき、文部省告示第13号による「博物館に相当する施設」に指定される。
接収解除。館の名称を京都市美術館に改称。京都市美術館条例制定。「京都市美術館開館記念京都名作展」開催。京都市美術館規則制定。

1953 昭和28年

第5回京展開催。会場難により昭和24年から中断していたが、この年から賛助出品、委嘱出品を設け、第5部に書を加えて再開。開館20周年記念日本名作展「天心を中心とする現代日本画の生成と展開」開催。

1955 昭和30年

「フランス美術展」開催(朝日新聞社・東京国立博物館主催、京都市後援)。大規模な海外美術展開催の端緒となる。博物館法及び同法施行規則の改正に伴い、文部省告示第108条によりあらためて「博物館に相当する施設」に指定される。

1956 昭和31年

「安井曾太郎遺作展」開催。国立近代美術館(東京)との企画提携による。「第10回市民美術展」開催。
アマチュアのための市民美術展を新たに美術館が担当して開催することになる。

1957 昭和32年

「1957京都アンデパンダン展」開催。画家有志で開かれていたものを京都市主催で開催することになる。
本年度から美術品購入予算が計上され、美術品購入審査員規則制定、審査委員8人選任。この年は竹内栖鳳「雨」、小野竹喬「冬日帖」などの購入に至る。京都市美術館友の会発足。京都市美術館ニュース創刊。第1号発行。

1958 昭和33年

京都市美術館友の会児童美術教室発足、開講。

1960 昭和35年

常設展第1回を開催。長らく途絶えていた常設展を接収解除後初めて再開し、所蔵品ほかを陳列。

1961 昭和36年

京都パリ友情協約にちなんで「京都パリ交歓フランス陶芸展」が企画され、選抜された作家による京都陶芸展をフランスのセーブル国立製陶所で開催。また交歓の「フランス陶芸展」を本館で開催。

1962 昭和37年

第14回京展開催。この回から京展賞、須田賞を設ける。故・須田国太郎氏の遺族から京展出品作品に対する須田賞賞金に充てる資金として50万円の寄付を受け、この年資金管理運営のため京都市美術館基金条例制定。

1964 昭和39年

開館30周年を機に「京都市美術館と所蔵品」を編集刊行。「ミロのヴィーナス」特別公開。京都市、国立西洋美術館、朝日新聞社との共催展。開館以来最高の89万人余の入場者。

1965 昭和40年

「スライドによる美術講座」第1回。初步的な美術入門講座として春秋二期開講。
「京都市美術館年報・昭和39年度」刊行。昭和13年以来発刊が途絶えていた年報を復刊。
「ツタンカーメン展」開催。京都市、東京国立博物館、朝日新聞社との共催展。「ミロのヴィーナス展」をしのぐ107万人余の入場者。

1967 昭和42年

「京都市美術館図書資料目録」発行。

1968 昭和43年

「楠部弥式作陶五十年展」開催。現存作家個人の業績を顕彰する特別展開催の第一回。

1969 昭和44年

ロダンの「アダム像」、市役所前から美術館内へ移転。

1970 昭和45年

大阪万博記念事業として、「京都の美術工芸、その伝統と精粹展」開催、「万博記念第22回京展」(万博記念賞設定), 特別展「竹内栖鳳とその後の展開」の3展開催。

1971 昭和46年

新収蔵庫完成に伴い、竣工式を挙行。記念特別展「京都日本画の精華」開催。

1972 昭和47年

「京都アンデパンダン展」を隔年性にし、新たに隔年性の「京都ビエンナーレ」を開催。

1973 昭和48年

開館40周年記念式挙行。記念特別展「昭和期に於ける京都の日本画と洋画」開催。記念事業として本館冷暖房設備を新設。併せて「京都市美術館40年史」を刊行。

1974 昭和49年

第26回京展開催。洋画部門に併陳されていた版画が単独部門として独立。

1976 昭和51年

平常陳列として開かれてきた展観を「常設展コーナー」に名称変更して開催するようになる。併せてテーマを設けた小企画展を「主題陳列」に呼称変更、第1回目を翌年の常設展コーナーと併せて開催。

1978 昭和53年

第30回京展開催。「第30回京展記念市長大賞(各部門1本、賞金50万円)」設置、会期に先立ち一般に無料公開。

1979 昭和54年

叢書「京都の美術」刊行を企画、第1冊目の「須田国太郎・資料研究」を発刊。

1980 昭和55年

美術教室を改築。叢書「京都の美術」第2巻「京都の洋画資料研究」を刊行。

1981 昭和56年

叢書「京都の美術」第3巻「竹内栖鳳の素描 資料研究」を刊行。京展書部門に中野賞を設ける。

1982 昭和57年

障害者用エレベーター設置。

1983 昭和58年

開館50周年記念式挙行。記念特別展「京都市美術館開館50周年記念特別陳列 半世紀のコレクション」を開催。記念事業としてこのほかに「イタリア姉妹都市からの贈りもの フィレンツェ美術展」を開催。

1985 昭和60年

京展の日本画部門に栖鳳賞を設ける。

1986 昭和61年

京展の工芸部門に楠部賞、書部門に日比野賞を設ける。小企画展「主題陳列」を「今日の作家」シリーズとして新発足、「常設展コーナー」と併設。

1987 昭和62年

作品搬入用エレベーター設置。「今日の作家」シリーズと「常設展コーナー」を合体して「京都の美術 昨日・きょう・明日」シリーズとして新発足。

1988 昭和63年

美術館友の会が30周年を迎える記念誌を発行。京展の鑑査を一部報道関係に公開する。京展の第40回を記念して「第40回京展記念賞」を各部に設ける。

1990 平成2年

叢書「京都の美術」第4巻「竹内栖鳳の資料と解題 資料研究」を刊行。

1993 平成5年

開館60周年記念式を挙行。記念特別展「京都市美術館開館60周年記念特別展 珠玉のコレクション」を開催。

1997 平成9年

平成9年度から「美術友の会」に委託し、「アートフレンド事業」を実施。「市民美術講座」「ワークショップ」「絵画教室」などの教育普及事業を開催。本年度より主催・共催展にあわせてワークショップを実施。「京都市美術館友の会」40周年記念式典を開催。

1998 平成10年

「所蔵品名品展」シリーズを開始。所蔵品の展示機会を増やす。京都市自治100周年記念「京都・パリ友情盟約締結40周年記念特別展「京都の100年・パリの100年」」を2部構成で会期をずらして開催。開館50周年のフィレンツエ展以来の姉妹都市との大規模な展覧会。

1999 平成11年

「1999京展」開催。50回を機に全点公募制とし、美術館長が選定する京展委員の会議で審査員を選出、受賞内容をあらため美術館が所蔵にふさわしい作品を選ぶ「京都市美術館賞」を新設した。

2000 平成12年

「京都市美術館コレクション展」シリーズを開始。別館の開設により常設的に収蔵品を展示できるようになり、5期にわたってそれぞれテーマを設け順次コレクションを紹介していくこととなった。京都市美術館別館開館式を挙行。京都会館別館の和風外観を保全しながら内部を全面改装し、ギャラリー機能の

一部を担う施設とするもの。20日からの「美工のあゆみ・創立120周年記念展」で供用開始。

2001 平成13年

「京都市美術館の歩み」コーナーを「京都市美術館コレクション展」会場内に設ける。

2003 平成15年

開館70年記念展「うるわしの京都 いとしの美術館」開催。開館70周年特別企画展「劉生と京都—「内なる美」を求めて—」開催。開館70周年記念式典挙行。

2004 平成16年

特別展「新説・京美人」開催。海外展「パリ マルモッタン美術館展—モネとモリゾ 日本初公開ルアール・コレクション」、「フィレンツェ—芸術都市の誕生—展」開催。普及教育でアメリカ・アレナスによる「子供鑑賞教室」を企画。日展会場は本館と別館を用いていたが第36回日展から全科本館展示となった。

2005 平成17年

美術館の年間観覧者数が953,391人となる。

特別展「修羅と菩薩のあいだで—もうひとりの人間像—」開催。海外展「ルーヴル美術館展 19世紀フランス絵画 新古典主義からロマン主義へ」入場者数424,810人。

友の会でアトリエ訪問をこの年から開始。同年は中村孝平、近藤高弘のアトリエを訪問。この年より迎賓館の地元所蔵作品貸出事業を開始。一階南側トイレ改修工事。収蔵庫壁面改修工事。

2006 平成18年

2006京展より若手作家育成を目的とした「館長奨励賞」を設ける。特別展「浅井忠と関西美術院展」開催。海外展「いま甦る巨匠たち400年の記憶 - 大エルミタージュ美術館展」入場者数203,123人、「ルーヴル美術館展 - 古代ギリシア芸術・神々の遺産」207,938人。ワークショップで「美術館に森のベンチを作ろう」を企画。本館中央系統空調ファン改修・収蔵庫内アスベスト除去工事。

2007 平成19年

友の会50周年事業開催。昭和32年に結成した京都市美術館友の会が50周年を迎えて、友の会から①美術館紹介DVD「京都市美術館」(上映時間20分)②42型液晶テレビを受贈。

特別展「京都と近代日本画—文展・帝展・新文展100年の流れのなかで」を開催。「フィラデルフィア美術館展 印象派と20世紀の美術」入場者数202,171人。日展100年記念のシンポジウムを京都会館で開催。
事務所屋根改修工事。

2008 平成20年

2008京展で具象的表現の奨励として、芝田記念賞を設ける。京都市美術館コレクション展「京都と近代日本画—文展・帝展・新文展の時代」を高知県立美術館で開催。

本館一階北側恒温恒湿設備更新工事。

2009 平成21年

美術館の総入場者は1,000,000人を超え、1,111,357人。また友の会会員1,295名となる。副館長職が置かれる。

「京都画壇の華 京都市美術館所蔵名作展」を宮城県美術館で開催。海外展「ルーヴル美術館展—17世紀ヨーロッパ絵画」入場者数618,321人。

夏休み特別企画「京北の風景スケッチ紀行」を岩澤重夫先生の指導で行う。京都ミュージアムズ・フォー発足し、参画する。本館一般空調改修工事。一階東及び北トイレ改修工事。収蔵庫屋上改修工事。

2010 平成22年

美術館年間総入場者は、829,132人。海外展「ボストン美術館展 - 西洋絵画の巨匠たち」入場者数257,848人。共催展「京都日本画の誕生—巨匠たちの挑戦—」「高島屋百華展—近代美術の歩みとともに—」を開催。第42回日展で従来の列品解説に加え、スライド解説「日展—新しい風を見る」を開催。初めて公園内における野外企画展「遭遇領域—野外造形展」を開催。共催展「親鸞展—生涯とゆかりの名宝」開催。友の会で京都市内の文化施設めぐりを同年より実施する。本館一階南側窓枠改修工事。本館二階南北トイレ改修工事。

2011 平成23年

美術館年間総入場者が1,000,000人を超える1,287,166人。第26回国民文化祭を開催。海外展「フェルメールからのラブレター」入場者数379,528人。「印象派・ポスト印象派 奇跡のコレクション ワシントン・ナショナル・ギャラリー展」入場者数307,456人。本館排水設備改修工事。

2012 平成24年

共催展として「上村淳之展 - 作家の眼」と「須田国太郎展—没後50年に顧みる」を開催。夏のクール・スポットとして「夏の彫刻展」を開催。海外展「大エルミタージュ美術館展 世紀の顔 西欧絵画の400年」入場者数206,843人。姫路市立美術館と島根県立美術館にて「麗しき女性 - 松園・青邨・契月・麦僊・不矩」を開催。東京・横浜・大阪・京都の高島屋にて京都市美術館・細見美術館コレクションによる「美の競演 京都画壇と神坂雪佳」を開催。上村松園の《春光》を収蔵。本館陸屋根等防水工事。

2013 平成25年

海外展「ゴッホ展 - 空白のパリを追う」入場者数198,056人。「リヒテンシュタイン - 華麗なる侯爵家の秘宝」入場者139,675人。

自治記念式典で功労者を「京都市美術館開館80周年記念特別表彰」。友の会2,000人超える。京都市美術館開館80周年記念展「市展・京展物語」、「下絵を読み解く 竹内栖鳳の下絵と素描」を開催。京都市美術館開館80周年記念「竹内栖鳳展 近代日本画の巨人」。京都市美術館開館80周年記念式典を行う。本館煙突改修工事。

3 「京都市美術館将来構想」検討の経緯

- 平成25年 6月5日 市長から京都市美術館評議員会に諮問
→京都市美術館評議員会の下に「将来構想検討委員会」設置
- 平成25年 7月30日 第1回将来構想検討委員会
9月5日 第2回将来構想検討委員会
11月6日 第3回将来構想検討委員会
12月26日 第4回将来構想検討委員会
京都市美術館評議員会
- 平成26年 3月3日 第5回将来構想検討委員会
3月11日 京都市美術館評議員会
3月13日 京都市美術館評議員会から市長に答申

※最終答申とりまとめの参考にするため、平成26年1月21日から2月20日までの間、「中間まとめ」に対する市民意見募集を行った。

〈京都市美術館評議員会評議員〉

氏名	職名
岩倉 壽	日本画家
内山 武夫	美術評論家
太田垣 實	美術評論家 元大阪成蹊大学芸術学部教授
梶谷 宣子	染織美術研究家 メトロボリタン美術館終身名誉館員
春日井 路子	工芸染織家 日本現代工芸美術家協会評議員
加藤 類子	美術評論家
川村 悅子	洋画家、京都造形芸術大学教授
杭迫 柏樹	書道家
小清水 漸	彫刻家
小谷 真由美	(株)ユーシン精機社長
白石 方一	京都新聞社 会長兼社長
建畠 哲	京都市立芸術大学 学長
仲間 裕子	立命館大学教授(西洋美術史) アジア芸術学会評議委員、民族芸術学会理事
布垣 豊	京都中央信用金庫理事長 京都市美術館友の会会长
長谷 幹雄	京都經濟同友会代表幹事、長谷本社社長
柳原 正樹	京都国立近代美術館 館長

〈京都市美術館評議員会「将来構想検討委員会」委員〉

氏名	職名
上村 淳之	日本画家・京都市学校歴史博物館館長
内山 武夫	美術評論家
太田垣 實	美術評論家 元大阪成蹊大学芸術学部教授
梶谷 宣子	染織美術研究家 メトロボリタン美術館終身名誉館員
加須屋 明子	京都市立芸術大学美術学部准教授
川嶋 啓子	市民公募委員
倉森 京子	NHK エデュケーション特集文化部専任部長
高橋 信也	森ビル株式会社顧問・森美術館顧問
建畠 哲	京都市立芸術大学 学長
布垣 豊	京都中央信用金庫理事長 京都市美術館友の会会长
福本 双紅	市民公募委員
細見 良行	細見美術館 館長 京都岡崎魅力づくり推進協議会
松尾 恵	(公財)京都市芸術文化協会理事 (公財)京釜文化振興財団評議員
蓑 豊	兵庫県立美術館 館長
門内 輝行	京都岡崎魅力づくり推進協議会アドバイザー、 京都大学大学院工学研究科教授
奥 美里	京都市文化市民局文化芸術担当局長
潮江 宏三	京都市美術館 館長

〈京都市美術館将来構想に関する市民意見の募集結果について〉

(1) 市民意見の募集

① 募集期間

平成26年1月21日(火)～平成26年2月20日(木)

② 募集方法

リーフレットの配布、ホームページへの掲載等

③ 応募方法

郵送、FAX、電子メール、ホームページ上の送信フォームからの送信、持参

(2) 募集結果

① 御意見数

御意見者数：187(御意見総数：736)

② 御意見をいただいた方の属性

男女別

区分	件数	構成比(%)
男	105	56.1%
女	65	34.8%
記載なし	18	9.1%

年代別

区分	件数	構成比(%)
20代	10	5.3%
30代	37	19.8%
40代	37	19.8%
50代	26	13.9%
60代	23	12.3%
70代	14	7.5%
80代	3	1.6%
記載なし	37	19.8%

居住地別

区分	件数	構成比(%)
京都市内	87	46.5%
京都府	8	4.3%
大阪府	5	2.7%
滋賀県	6	3.2%
記載なし	81	43.3%

③ 御意見の内訳

全体について	127件
目指すべき方向性と具体的方策について	231件
京都市美術館の再整備について	221件
運営体制の整備について	129件
その他	28件

京都市美術館将来構想

平成26年3月発行



京都市美術館

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町124

TEL 075-761-4107 FAX 075-761-0444

URL <http://www.city.kyoto.jp/bunshi/kmma/>